

質的研究は 何を指すか

稲垣 みどり
(東京国際大学)

まずはじめに・・・「もやもや」の共有(30分?)

- ▶ 「質的研究」と聞いて、何を思い浮かべますか。
ご自分の研究で「質的研究」を実践してみて、疑問に
感じることも、もやもやしていることはありますか。



なんでもよいので、紙に書いてみてください。

1. プロフィール_(5分)

- ▶ 大学は文学部、演劇学（西洋近代演劇）専攻
- ▶ 中学、高校で国語科教員。
教育学（国語教育、戦後日本文学）で修士号取得。
- ▶ アイルランドに13年間居住。高校と大学で日本語を教える。
- ▶ 8年前に家族で日本に帰国。博士号（日本語教育学）取得。
専門は、年少者日本語教育、継承語教育、異文化間教育、
移民研究

+ 現象学（近代西洋哲学）

なぜ？

—私が現象学、哲学研究に “はまった”理由—(20分)

博士課程の私の研究テーマ

アイルランドの在留邦人の親たちの「複言語育児」

【研究の変遷】

1. そもそも研究動機—アイルランド在住時

アイルランド在住の「日系国際児」の親たち(私も当事者の1人)が子ども達の日本語学習のための「新しい学校」を設立。どのような日本語カリキュラムをそこで実践するべきか。

↓

2. 2011年9月に日本に帰国。早稲田大学日本語教育研究科修士課程に入る。

2012年9月博士課程進学。研究を続けるうち、「新しい学校」でのカリキュラムの前に、「理念」が必要なのでは、と考え始める。

↓

3. 2012年から、アイルランドの日本語を含む複数言語環境で子どもを育てる日本人の親たちの育児実践を「複言語育児」の分析概念で捉え、インタビューを開始。

4. 2014~2016年

親たちへのインタビューを実施。個別の親の「意味世界」が徐々に明らかになった。

→投稿論文3本執筆。ここからドツボに。



博論が、書けない

私は、何のために親たちの「意味世界」を描きたかったのか？

なぜ私は「行き詰まった」のか？

1. 私が日本語教育の大学院で学んだ質的研究の理論的枠組み

使用テキスト例: メリアム『質的調査法入門』ミネルヴァ書房

K.ガーゲン『あなたへの社会構成主義』ナカニシヤ出版

桜井厚『ライフストーリー・インタビュー』せりか書房

これらが依拠する理論的基盤

社会構成主義、構築主義、対話構築主義



ポストモダンの相対主義

なぜ私は「行き詰まった」のか？

2. 大学院の「質的研究」の授業では、社会構成主義に基づいたいろいろな方法論を学ぶのみ。

それらの方法論を支える**認識論そのもの**について、まったく学ぶ機会がなかった。



社会構成主義や構築主義以前の、認識論の哲学をある程度ちゃんと学ばないと、認識論的に自分がどの立場に立つか、なんてことはわからない。土台ががないと方法論や「研究の書き方」をいくら学んでもグラグラする。

👉 **自分には認識論の哲学的基盤がなかった**

ポストモダン思想に依拠する質的研究

▶ 質的研究の3つの特徴(フリック2016)

① 象徴的相互作用論の流れ

個々人の主観的な意味付けを探ろうとする

② エスメソドロジー

日常のありふれた行為とその産物に関心を向ける。

③ 構造主義的もしくは精神分析的立場

心理的社会的な無意識の過程にまず目を向ける。

質的研究における「現実」とは？

- ▶多くの質的研究では、インタビュー等をとおして対象となる人物の主観的な世界を再構成し、その意味を理解しようとする。
→再構成されたテキストは主観的世界の現実を写し取ったものとみなされ、様々な分析によってその現実を明らかにする。



研究者によって記述された語り、再構成されたテキストは本当に主観的世界における現実を再現したものか？

社会構成主義： 現実はそのに関わる人々の相互作用によって構成される。各人の意味付けと無関係に客観的現実が存在しない

ポストモダンの思想に依拠する質的研究

基本的な構え

客観的な真実を認めず、研究対象となる人物の語る
現実には、さまざまな文脈のなかで研究者との相互作用
によって構成されたもの、と考える。



私が日本語教育研究で行っていたライフストーリー研究も
基本、この構え。相互構築主義、対話構築主義に基づく

一方で

当時(2016~2017年)、私のまわりの日本語教育研究では—
公共的日本語教育
市民性を目指す日本語教育
社会参加のための日本語教育
平和を目指す日本語教育 etc

日本語教育の目指すべき「価値」がテーマに。

「何のための日本語教育」日本語教育の「意味」と「価値」を語る言説。どれも根拠が見えにくい。恣意的な価値の設定に陥る

私の研究も

そもそもは、アイルランド在住の日本人の親たちが作った日本語学習のための「学校」で、どのような日本語の教育が目指されるべきか、という**日本語教育の目指すべき「価値」がテーマ**だった。

しかし・・・

ライフストーリー研究で、「複言語育児」実践の親たちの個別の意味世界は描ける。ひとりひとりの多様な育児実践の意味付けは明らかになる。

が、そこから、目指すべき「価値」の設定はできるのか？

価値の創出の原理は、相対主義的ポストモダン思想にはない

- ・ 真理なんてありえなくて、すべてが相対的
- ・ みんなちがって、みんないい

現象学に出会って、やっと書けた博論(2016年～)

「複言語育児」を実践する親たちの意味世界
— 共通了解の成立を目指す日本語教育の提言 —

博士論文題目

2018年7月提出：早稲田大学

海外の複数言語環境で子どもを育てる親の、子どもへの日本語教育をめぐる親の「意味づけ」を、親のライフストーリーインタビューや、親を対象としたワークショップの実践によって考察する。



一人一人の親の「複言語育児」のライフストーリーインタビューを、現象学的手法の「本質観取」のアプローチを用いてまとめる。「複言語育児」の本質とは何か、というまとめ方をする。

何のために言語（日本語）を学ぶのか、言語教育の「意味」と「価値」を、個別的にはではなく本質的な普遍性を目指して考察しようとする試み。

私の博論の行きついたところ

一人一人の親の「複言語育児」のライフストーリーインタビューを現象学的手法の「本質観取」のアプローチを用いてまとめる。



「複言語育児」（自分で生成した分析概念）の本質とは何か、
という内容で博論をまとめる。

**何のために言語（日本語）を学ぶのか、言語教育の
「意味」と「価値」を問う課題**

「共通了解の成立を目指す日本語教育の提言」のタイトルで博論提出

第2部

フッサール現象学の原理

1. 本質学と事実学

フッサール現象学の原理

- ▶現象学（phenomenology）とは、ドイツの哲学者、エドモント・フッサール（1859～1938）の提唱した学問領域。**物事の本質（意味・価値）を扱う。**
- ▶フッサールは認識問題を解決するためにはいったん**すべての認識を主観のうちに還元**して、その確信の構造を確かめるしかないと考えた。この考え方が、**「確信成立の条件の解明」**である。主観—客観という従来の対立図式を取り払ったところで、すべての対象を「主観」の内側の確信と捉え、確信成立の構造を取り出す方法をとる。この時に**客観存在の観念については方法的にいったん判断停止**をする。これが「エポケー」（判断保留）。
- ▶現象学は、事象そのものに迫るために、方法的に**世界の一切を私にとっての表れとみなし**、それを記述する学。
- ▶その記述は万人にとって納得できる仕方で記述する。（→**本質観取**）

フッサール現象学の基本的な立場

①本質学と事実学

『イデーンI-I』第一章第七節(2001第10刷みすず書房)p74~を参照して稲垣作成

本質学

意味や価値を言葉によって記述していく試み

意味や価値は主観的に体験・了解される。

人文科学の領域のうち、意味や価値を扱う領域は、本質学の立場でしか迫ることができない。

人間や社会は自然とは違う独自の「本質」を持っており、この本質を捉えなくてはならないから。

事実学

実証的に証明し得る世界。天文学、物理学などの自然科学。自然界のことは実証的に証明し得る。また人文領域でも実証的な研究に基づく社会科学（社会学）なども事実学の領域である。

学問の領域

自然科学

自然界の事物を扱う領域:**事実学**の領域。世界や事物がどのような構造になっているかを明らかにするのが研究の目的。数的なデータ、統計的なデータによる実証的な研究が事実学の方法。

人間科学

人間を対象とした領域: **本質学**の領域。本例会では、教育、言語、教育、介護、心理臨床など主に「人を支援する実践を支えるための学問」(西2015)を念頭におく。人にとっての「意味」や「価値」はどのようなものか、という問いに迫る。

👉 質的研究は、こちらのアプローチだと私は考える。

フッサールの問題意識:事実学ばかりに偏る学問への批判

『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』 細谷恒夫・木田元訳(2016) 中公文庫版

※フッサール最晩年(死の3年前)、1935年にプラハの大学での講演録。ナチス台頭の嵐の中で書いた。フッサール自身はユダヤ人。1933年にナチスにより大学教授や作家への取り締まり令発布。フッサールも教職から追われ、ドイツ国内で著書論文発表禁止。

第一部 ヨーロッパ的人間の根本的な生活危機の表現としての学問の危機

第二節 **学問の理念を単なる事実学に還元する実証主義的傾向。**(p19)

学問の「危機」は、学問が生に対する意義を喪失したところにある。

「(なぜ)**学問の理念が実証主義的に限局されるようになったのか。**」(p22)

→要約すると、世界とは何か、神とは何か、といった問いは、形而上学的な問題で、哲学の本質洞察の領域。事実への問いに比べてより高い尊厳を要求する。今こそ本質学の学問を取り戻さないといけない。



この問題意識、実証主義的、科学的なデータに基づく研究をよしとする現代にもつながるのではないか？量的研究からの質的研究への批判にも通じるのでは(稲垣)。

私の考える人間科学の課題と使命

人間や人間の社会ってたんなる有機的なシステムなのか？

人間や人間社会が「どのように存在するのか」を明らかにする
実証的な研究も、もちろん有意義で必要。

しかしそれよりも、人間にとってより重要なのは、人間の社会は
どうあるべきか、というあり得べき社会の在り方と、その中での
自分の生き方を探究し、実践することではないか？

自然の事物のように、**あるがままの構造を明らかにすること、
そのこと自体が目的化するだけでいいのか。**

☆ **「あり得べき人間や社会の在り方」の探究 = 人間科学の使命**

フッサール現象学の原理

2. 認識論の原理

認識論の要点—認識の謎を解く

ヨーロッパの近代哲学における認識論



主観と客観は一致するのかわからないのか

(あなたが見ているリンゴと私が見ているリンゴは、同じですか)

- ▶ デカルト「私」の認識(主観)は外部の世界(客観)に一致するか否か
結論「しない」。なぜなら人間が形成する一切の認識は
つまるところ主観の認識にすぎないから。→懐疑主義
でも！「私は在る、ゆえに私は存在する」だけは確かだ！
一切の認識を意識の内側から打ち立てようとする点で、現象学
につながる思考。

▶カント『純粹理性批判』で、人間の認識装置(理性)を徹底的に検証した。

アンチノミー(二律背反)理論

世界に始まりはあるのか、ないのか、そういったことはどんなに理性によって突き詰めても、どちらも証明できる



人間は決して「物自体」を認識することはできない。

ドイツ観念論: 物事の本質を洞察しようとする流れ

▶19世紀半ばのヨーロッパ

天文学、物理学、医療など自然科学の領域の学問が飛躍的に進む。ドイツ観念論の物事の本質を洞察しようとする哲学、人文学の領域は、自然科学の陣営から批判を受けるようになる。



人文科学の領域も、オーギュスト・コントが『実証的精神論』で、人間が作り出した「社会」もまた、天文学や他の自然科学の諸理論と同様に、実証主義的方法によってその法則が解明できるとする。 **社会学は、ここから始まる**

認識の謎(竹田2015)

認識における主観と客観の一致の不可能性を覆せないことであらわれる認識上の難問。

- 1) 主観と客観の一致が不可能なら、そもそもどんな「正しい認識」も存在し得ないし、哲学的真理もありえない。
→ 相対主義、懐疑主義の立場
- 2) 主観と客観の一致がありえないなら、自然科学が作り上げてきた自然の客観認識も説明不可能となる。
- 3) 正しい認識が存在しないなら、人間や社会における正しさ、善や正義についてもおよそ普遍的な基準は存在しない。
→ では何が決める？ 力ある者が決めるという **「力の論理」** に行きつく。

『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』 再び

- 人文科学の領域まで実証主義に制覇されてしまっは、普遍的な学問というものの最も重要な本質がそぎ落されてしまう。学問は単なる「事実学」となり、ヨーロッパ哲学が本来持っていた人間の生の意味に迫る「本質学」の意義は、現在(1930年代)危機に瀕している。

「もし諸学がこのように、客観的に確定しうるものだけを真理と認めるのであるならば、また歴史が精神的世界のすべての形態や人間生活を支え拘束するもの、すなわち理想や規範がつかのまの波のように形づくられてはまた消えてゆくものであること、このようにかつてもそうであったし今後もそうであろうということ、いつも理性は非理性へと転じ、善行はわざわざいになるということにすぎないのであるなら、世界と世界に生きる人間の存在は、真に意味を持ちうるであろうか。我々はこういうことで満足できるであろうか。歴史的できごとが、幻想にすぎない高揚と、苦い幻滅のたえまないつながり以外の何ものでもないような、そういう世界にわれわれは生きることができるであろうか。」 (p21、第二節)

「認識の謎」が解明できないと、人間にとっての普遍的な価値はこの世にないことになる。

それは恐ろしい世界。「神」なき世界に人間が生きる「意味」は？

フッサール 1938年にユダヤ人として大学での教職を追われたまま、孤独と失意のうちに没する。

その後、ドイツはナチスドイツの支配にのまれて**戦争**へ。

「力の論理」が
支配する世界へ

①主観と客観の一致

▶我々は、この世界、事物をどのように認識するのか

認識は、一個の心的体験であり、**認識する主観の認識である**



認識される客観が対立している

認識された客観と認識自身との一致を確かめ得るのか？

主観はいかにして客観に的中するのか？

(フッサール『現象学の理念』講義1)

主観と客観の 一致①



図1 認識論の基本図式

図：『現象学入門』（竹田1989）より引用

「信念対立」を克服するため —対立するヨーロッパの世界観

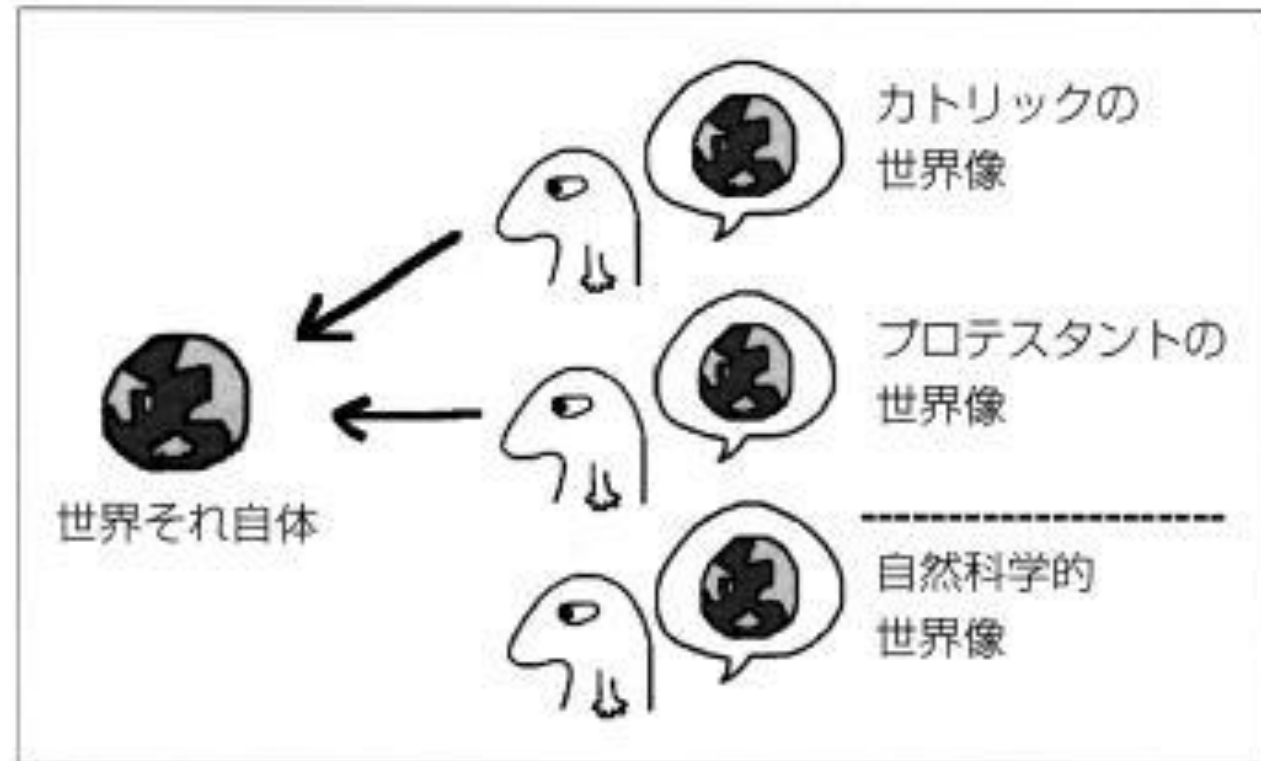


図3 自然科学的世界像の登場

②現象学的還元－確信成立の条件の解明

▶主観/客観の認識問題を解決するために－

今、自分が見ているモノ、世界は本当に存在するのか？

(主観的な認識)

(客観的事物)

例) リンゴ

私はなぜ、目の前の物体を「リンゴ」だと思うのか？

赤いから？前に見た「リンゴ」と同じだと思うから？

でも、それは本当に「リンゴ」？どうやって確かめる？

→ いったんすべての認識を主観のうちに還元して、その確信の構造を

確かめる ⇒ **確信成立の条件の解明**

主観と客観の 一致②

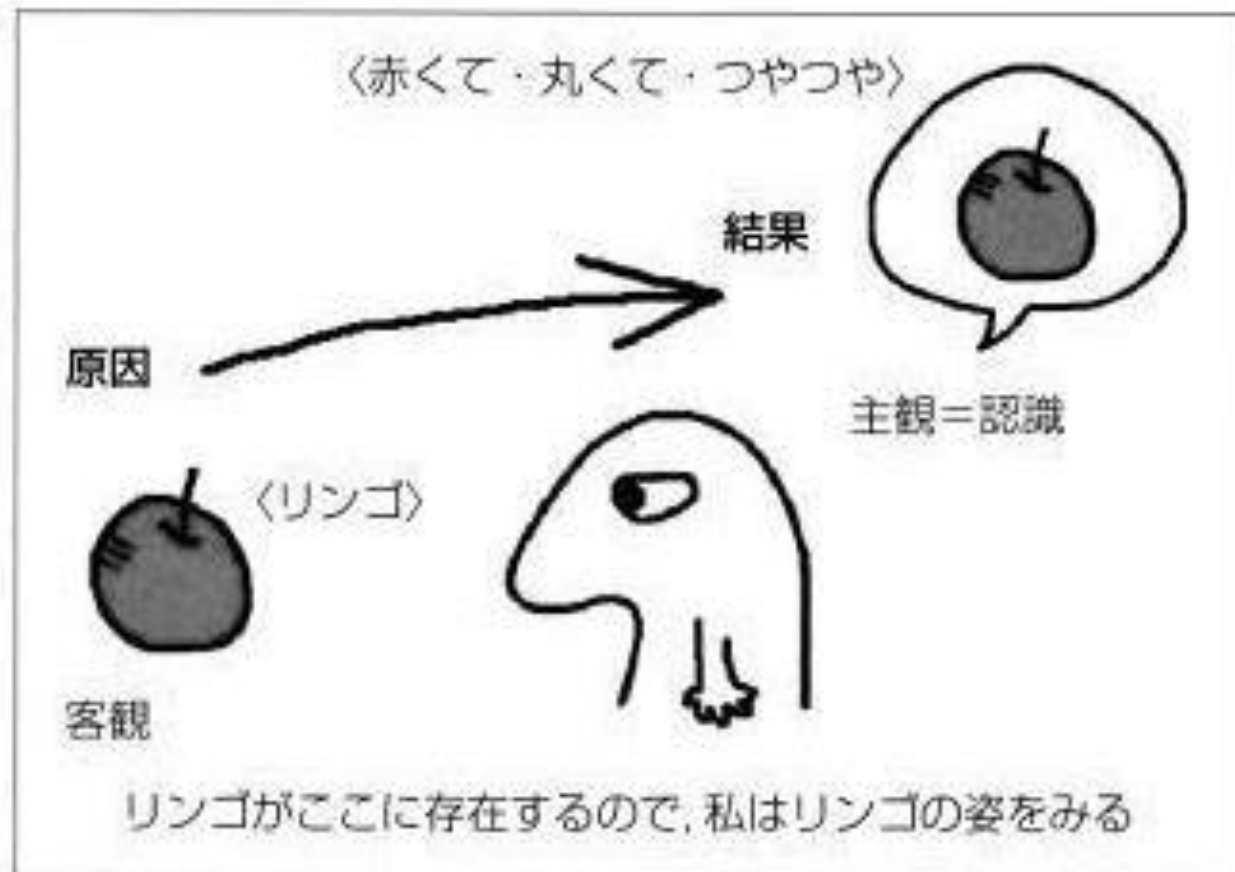


図4 主観-客観の図式

現象学的 還元

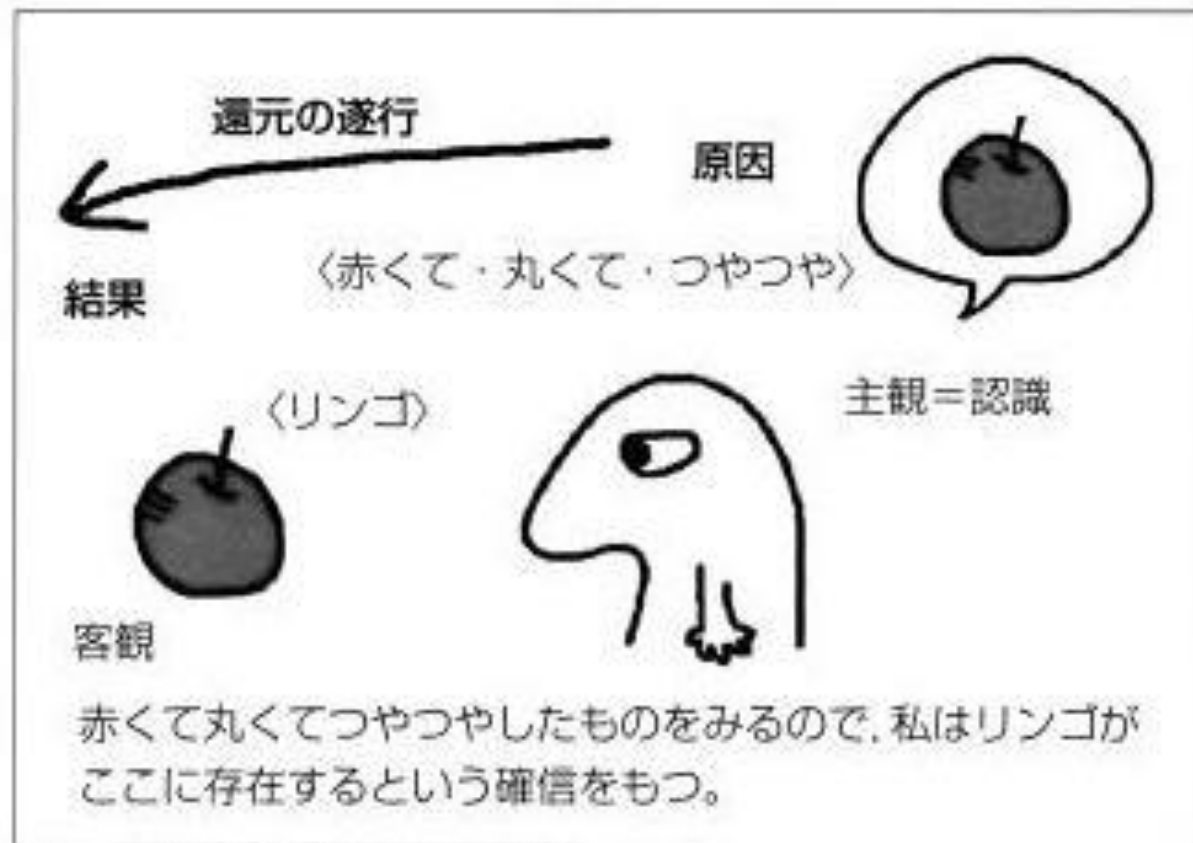


図5 現象学的還元の遂行

現象学の手法としての「本質観取」

- 本質観取は現象学の「確信成立の条件の解明」のために、現象学的な事物の見方を基盤にして出てくる**現象学の原理を方法化**したもの。
- 本質観取によって、**客観存在をいったんエポケーしつつ、ある概念の核心的な意味が「言葉」として自らの経験を内省しつつ取り出される。**そしてその主観的な内省による「言葉」が、**他者との相互批評にさらされることによって普遍性を獲得していく可能性を持つ。**
- **「本質観取」の方法の要諦は、内省によって経験からことからの核心をなす本質を取り出し、それを間主観的に検証して共通了解へ持ち込むこと。**（竹田2017）
- **「本質観取」は、単なる合意形成ではなく、「できるだけ共通了解可能な意味本質」**（苫野2014）めがけてコミュニティの成員同士が対話を重ねていく営為である。

「本質観取」の例

▶ある概念

(例：「恋」大学の多国籍の留学生のクラスで。レベル中級～上級前半)

「恋」とは何か？

- 1) 自分の内省と経験から、「私のことば」として「恋」を言葉として取り出す。
例) 異性として
- 2) グループで対話によって相互批評し、吟味する。
(類似概念(「愛」や「友情」との比較、「恋」を定義する)
- 3) 共通了解(みなが納得し得る)としての「恋」の定義は成立するか？

本質観取の目的

▶なぜ、ある概念の普遍性を取り出すことが重要なのか？



本質観取によって、**対話が生まれ**、ある概念の
共通了解を成立させることが可能になるから

→相互理解による信念対立の克服

以上のような「確信成立の条件」を現象
学的還元の基礎におく現象学が、
「本質学」の立場

本質学の立場

▶ 実証的データは参考資料にすぎない

自然科学の基本方法は、自然現象の数学化、デジタル化して統一的に記述。自然の諸現象は人間の身体性に対して一義的な因果性をもつ。→認識は広範な共通了解として成立。

▶ 人文科学の領域

例)政治学。どのような政治制度がみんなにとって「よい」か。価値を問う。歴史学は歴史の「意味」を問う。教育や言語教育も、「どのような実践がよいか」と問う、価値の問いが学の目的では。

→「正解」はないが、**答えが存在しないわけではない。**

本質学の立場 続き

▶人文科学の領域には、あらかじめ「正解」はない。

しかし、普遍性と妥当性を目指す、「本質」を目指す問いならあり得る。

→例「どのような教育がよい教育か」

「どのような言葉の教育が、よい教育か」

〇〇が、人間の生活にとってどうあるべきか、という問題が

人文科学の領域の中心的な課題。

だから、実証主義立場の人々の、実証的データを追い詰めることが客観認識に近づき得る唯一の方法、という信念は本末顛倒

質的研究によく使われる他の現象学と 本質学の考え方の違いも説明

(もし参加者からの質問があれば?)

解釈学の流れ

ハイデッガー以降、ブレンターノ、ガダマー、シュッツ等
現象学的心理学の立場

こちらの流れの「現象学」理論は、フッサールの言う本質学
とは違う。むしろ構成主義、相対主義の起源となる。

(▶フッサールとハイデッガーの立場の違いは、説明始めると長くなるので、質問、突っ込みがあった場合にのみ対応する)

質的研究における現象学の可能性 — 言語教育の観点から

- ▶ ポストモダン、相対主義を乗り越える思想である。
- ▶ 価値の創出の原理が、ここにある。
- ▶ 何のための言語教育—言語教育の意味と価値を措定する原理となり得る。
- ▶ 「ことばの教育はどうあるべきか」—「言葉の教育の本質」を徹底的に考えること。この本質学的思考が言語教育哲学として、ことばの教育の研究と実践の基礎づけとなり得る。

質的研究の光と可能性

「いま、在る」ものを明らかにする実証科学に基づく研究とは違って、人間とは何かという「人間」存在の解明を使命とする人間科学のアプローチである質的研究にこそ、人を対象とした実践や支援の「意味」と「価値」の創出の道が拓かれるのではないか。そのための方法論として、相対主義的ポストモダンに、そろそろ別れを告げてもいい頃では。



さよならポストモダン

終わりに

今こそ、「どのような言葉の教育がよい教育か」という言葉の教育の本質をめがける問いが言語教育の課題になるべきでは。恣意的な価値の措定に陥ることなく、この問いに答えるために。



「本質学的思考」へ

最後：後半のディスカッション(30分)

自由に、フロアと質疑応答

それともディスカッションポイントを絞ってグループで議論をした方がよいか

ディスカッションポイントの例

〈主要参考文献〉 一参照頻度順

質的研究編

- ・『人間科学におけるエヴィデンスとは何か 現象学と実践をつなぐ』(小林・西編2015)新曜社
- ・『質的研究入門〈人間の科学〉のための方法論』(フリック,小田博志訳2016)春秋社
- ・『質的研究のための理論入門 ポスト実証主義の諸系譜』(プラサド,箕浦康子監訳2018)ナカニシヤ出版
- ・『日本語教育のための質的研究入門 学習・教師・教室をいかに描くか』(舘岡編2015)ココ出版
- ・『日本語教育学としてのライフストーリー 語りを聞き、書くということ』(三代編2015)くろしお出版
- ・『インタビューの社会学 ライフストーリーの聞き方』(桜井2007)せりか書房
- ・『ライフストーリー インタビュー 質的研究入門』(桜井・小林編著2006)せりか書房
- ・『人生を物語る 生成のライフストーリー』(やまだ編著2010) ミネルヴァ書院
- ・『質的研究の考え方 研究方法論からSCATによる分析まで』(大谷2019)名古屋大学出版
- ・『「主観性を科学化する」質的研究法入門 TAEを中心に』(末武・諸富・得丸・村里編著)金子書房
- ・『初学者のための質的研究26の教え』(中蔦2015)医学書院
- ・『質的データ分析法—原理・方法・実践』(佐藤2008)
- ・『質的研究法マッピング(ワードマップ)』(サトウ・春日・神崎編2019)新曜社
- ・『現象学的看護研究 理論と分析の実際』(松葉・西村編2014)医学書院
- ・『質的調査法入門 教育における調査法とケース・スタディ』(メリアム,堀他訳)ミネルヴァ書房
- ・『はじめて「質的研究」を「書く」あなたへ 研究計画から論文作成まで』(太田2019)東京図書

現象学、哲学、現代思想編 その1

フッサール

- ・『イデーンⅠーⅠ 純粹現象学と現象学的哲学のための諸構想 第1巻 純粹現象学への全般的序論』渡辺二郎訳(2001) みすず書房
- ・『イデーンⅡーⅠ 純粹現象学と現象学的哲学のための諸構想 第2巻 構成についての現象学的諸研究』立松弘孝訳(2001) みすず書房
- ・『現象学の理念』立松弘孝訳(1965) みすず書房
- ・『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』細谷・木田訳(2016) 中公文庫
- ・『ブリタニカ草稿』谷徹訳(2004) ちくま学芸文庫
- ・『論理学研究1』立松弘孝訳(1970) みすず書房
- ・『論理学研究2』立松弘孝訳(1970) みすず書房

竹田青嗣

- ・『現象学入門』(1989) NHK出版
- ・『現象学は〈思考の原理〉である』(2003)ちくま新書
- ・『欲望論 第1巻 意味の原理論』(2017)講談社
- ・『欲望論 第2巻 価値の原理論』(2017)講談社

現象学、哲学、現代思想編 その2

- ・『世界の名著〈36〉 コント,スペンサー 社会再組織に必要な科学的作業のプラン 実証精神論 社会静学と社会動学 科学の起源 進歩について 知識の価値』霧生・清水訳(1970)中央公論社
- ・『純粹理性批判(上)(中)(下)』カント,篠田訳(1997他) 岩波文庫
- ・『存在と時間(一)~(三)』ハイデガー,熊野訳(2016) 岩波文庫
- ・『現象学』木田元(1970)岩波文庫
- ・『世界の共同主観的存在構造』廣松渉(2017)岩波文庫
- ・『社会構成主義の理論と実践—関係性が現実をつくる』ガーゲン,永田・深尾訳(2004) ナカニシヤ出版
- ・『あなたへの社会構成主義』ガーゲン、東村訳(2011) ナカニシヤ出版
- ・『現実はいつも対話から生まれる』ガーゲン・ガーゲン,伊藤監訳(2018) ディスカバー
- ・『知識社会学論考 現実の社会的構成』(バーガー+ルックマン,山口訳2008) 新曜社
- ・『生活世界の構造』シュッツ、ルックマン,那須訳(2015) ちくま学芸文庫
- ・『自己言及性について』ルーマン,土方・大澤訳(2016) ちくま学芸文庫
- ・『現象学的心理学への招待:理論から具体的技法まで』ラングドリッジ,田中・渡辺訳(2016)新曜社

例会へのご参加、ありがとうございました！

連絡先

稲垣みどり

midori.inagaki@gmail.com